

ひなわ じゅう しゅるい 火縄銃の種類とかたち

鉄砲百人組の姿を今に伝える、百人隊行列。その肩には火縄銃（ひなわじゅう）がかつがれています。しかし、よく見ると、火縄銃の細かな部分がそれぞれ違っているように見えます。では、火縄銃にはどのような種類のものがあつたのでしょうか。

戦国時代、天文12年(1543)頃に、種子島に伝えられた火縄銃は、またたくまに日本各地で作られはじめました。中でも、近江国国友村（おうみのくにくにともむら、現滋賀県長浜市）、和泉国堺（いずみのくにさかい、現大阪府堺市）は江戸時代をつうじて鉄砲が作られていた土地として知られていました。一見同じように見える火縄銃も、作られた場所によりその形や細部がちがっているのです。

・国友系

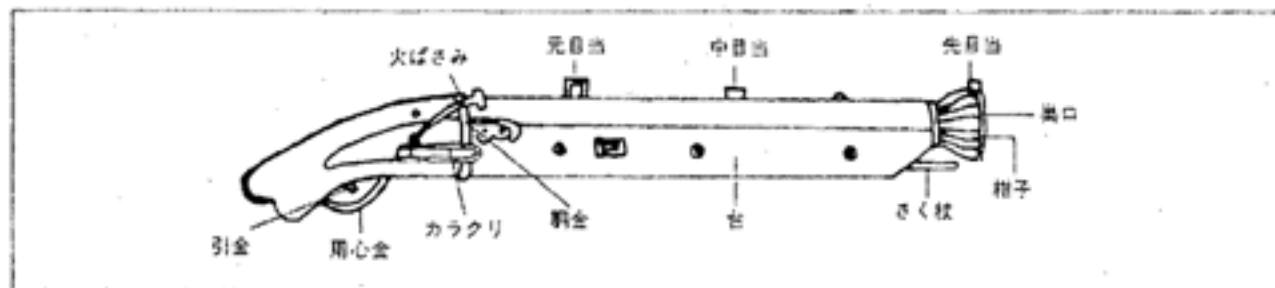
江戸時代、最大の鉄砲製造地として知られる国友村、そしてその系列の職人たちが製作した鉄砲をいいます。

国友系の火縄銃はほとんどが注文を受けてから作られました。銃口（じゅうこう）の先が八角になっており、銃口の部分を太くした柑子（こうじ）がないものが多かったようです。堺系と比べるとかざりが少ないのが特徴ですが、近江国日野（現滋賀県蒲生郡日野町）で作られたものには、銃の台にぼたんの花や、波に千鳥の飾りをはじめ、こったかざりが付いていました。

・堺系

国友とともに多くの鉄砲を作り続けた、堺で作られた鉄砲をいいます。

堺系の鉄砲は銃の台にきれいなかざりがついていたり、銃身（じゅうしん）に金や銀などをはめこんだ、象嵌（ぞうがん）があるものも多く見られます。これは、堺系の鉄砲が店頭で売られており、外観に気をくばっていたからだと言われています。銃身は角筒（かくづつ）がほとんどで、照準（しょうじゅん）をあわせる元目当（もとめあて）が富士山の形をしていました。また、柑子（こうじ）があり、銃の台をしめる胴金（どうがね）は幅が広く、他の金具と同じように彫刻が彫られていました。



火縄銃部分名称図

注：てっぽうは鉄砲とも書きますがパンフレットでは常用漢字表記の鉄砲で統一しました。

発行：新宿区大久保特別出張所 協力：新宿歴史博物館